京都新聞
2009年(平成21年)8月4日 火曜日

平和の思い 地域で継ぐ

与謝野町の元高校教諭ら

英国人の捕虜体験を翻訳、出版

第2次世界大戦中、捕虜として京都府北部の旧加悦町(現与謝野町)の鉱山で強制労働をさせられた英国ウェールズの男性が捕虜の体験と戦後に芽生えた平和交流をつづった手記が、与謝野町の元高校教諭と教え子の手で翻訳され、「憎悪と和解の大江山」と題してこのほど出版された。

原著「大江山の点呼」の作者フランク・エバンスさん(1996年没)は、44年から45年の終戦まで府北部の旧岩滝町(現与謝野町)の大江山捕虜収容所に入れられ、旧加悦町のニッケル鉱山で労働を強いられた。

エバンスさんは84年、英国アベリストウイス市から旧加悦町を再訪。「桜の平和メッセージ」を残し、両地域の高校生が相互に訪問し、交流するきっかけを作った。

大江山のふもとに立つ捕虜の慰霊碑の前に、出版された本を置く糸井さん(手前)と細井さん=京都府与謝野町・大江山運動公園

桜の平和メッセージ

旧加悦町の鉱山跡に近い大江山のふもとに1984年、捕虜の慰霊碑が建てられ、桜が植えられた。その際にエバンスさんが残したメッセージ。

「咲いているときも、散った後も美しい桜。二度と再び人間が、無残に命を失うことのないように。そして全ての人間が平和の内に生をまっとうできますように」

「過酷な事実 交流のきっかけ」

元高校英語教諭の糸井定次さん(73)=与謝野町上山田=は一昨年、初めて「大江山の点呼」を読み、身近で起きていた過酷な事実を知った。地元でも埋もれつつあった歴史を伝えようと、与謝野町出身の教え子で、カナダに住む元カレッジ職員細井忠俊さん(60)に呼びかけ、昨年から翻訳を続けてきた。

注釈を付けるための資料や写真を集めようと2人はそれぞれ渡英。エバンスさんが後遺症に苦しみ続けたことも取材し、後書きで紹介した。

細井さんは「過酷な体験があったからこそ、エバンスさんは平和の交流を切望し、今もそれが続く。彼が平和を大切に思った背景を伝えたい」と話す。

四六判390ページ。発行は彩流社(東京都)。2625円。(小山愛生)